



# 第四回 鎌倉文学館こども文学賞 作品集

## 応募総数

小学生の部 271作品

中学生の部 670作品

## 審査委員

三木卓（作家・詩人）

角野栄子（童話作家）

富岡幸一郎（文芸評論家・鎌倉文学館館長）

自由なきもちぢ

角野 栄子

『鎌倉文学館子ども文学賞』は今年で四回目を迎えました。新鮮な作品が沢山集まり、気持ちよく選考させていただきました。

小学生の部の大賞、幸田茉玖さんの「そら」は一年生の作品です。無邪気な言葉が魅力です。空は高く届かない……どうしても届かない、でも「いつかたべてみたいな」……どんな味がするのかな……。幸田さんの言葉で想像は一気に広がって行きました。そして読んだ人、ひとりひとりに新しい言葉が生まれます。言葉って不思議ですね。

中学生の部の大賞、金沢響子さんの「とんび」は、きれいな音を響かせながら、その向こうに、くすつと笑ってしまいうーモアを感じました。なかなかうまく鳴らないフルート。そこに自慢げな茶色い皇帝、「とんび」の声が重なります。一つの音に耳を澄ましていると、窓の外の風景が絵のように見えてきました。力のある作品でした。

私は子どもたちが作る作品が大好きです。どれも、好奇心と自由な気持ちにあふれています。いつまでもこの宝物を大事にしてくださいね。来年はどんな作品と出会えるでしょうか。こちらにも好奇心と自由な気持ちをもって、待っています。

こども文学賞

大賞

小学生の部 大賞 「そら」

横浜国立大学教育人間学部附属鎌倉小学校1年 幸田 芙玖こうだ ふくさん

そらって

てんじょうみたいに

すっとしているけど

やねにのぼっても

てをのぼしてみても

とどかない

おとなになったら

とどくのかな

かみひこうきを

とぼしてみても

やっばりとどかない

そらって

ほんとうにたかいのかな

いつかそらを

たべてみたいな

中学生の部 大賞 「とんび」

鎌倉女学院中学校1年 金澤響子さん  
かなざわ きょうこ

音がかすれる。

どんなに頑張っても言うことを

聞いてくれない 白銀の笛。

そっか、しょうがないよね。

だって私は まだ

フルートを始めて一ヶ月なんだから。

吹けなくたって まだいいんだ。

窓から吹きぬける風のような音が続く。

すると突然、

外からいかにも自慢げに

しかもグリッサンドをして

快い竹笛が聞こえる。

あ、とんびだ。

隣家の屋根に 雄々しく座った

茶色い皇帝。

皇帝の竹笛は

なんだか優雅で堂々としている。

何かむかつく。

何か悔やしい。

そうだ。

私も負けじと 頑張って吹くけれど

やっぱりできない。

いらいらして

これで最後だと決めて

息を笛の頭にたたきつける。

あ。

できた。

今、一瞬だけ。

暗く冷たい巢の中から

高く元気なひな鳥の音が――。

だからいつてやった。

おうい、とんびよ。

茶色い皇帝よ。

聞いてたか。

目を覚ました ひな鳥のソプラノの音が

お前の耳の中で

何回反響したか、と。

小学生の部 入賞

入賞 「おすしはうごく」

横須賀学院小学校1年 小川 更紗おがわさらささん

いらいそへんいらいそをまわってくだら  
ちいさいおすしがいいばいだ。  
きいろのくるまはたままじのおすし  
あかいくるまはまへらのおすし  
しろいくるまはいかのおすし  
ぴんくのくるまはサーモンのおすし  
おれんじのトラックはいくらのおすし  
みどりいろのまはあつあつのおすしや。  
うちいろのまはひひまへろ  
おすしのおちひはおうだんほじう  
はやくたへなまやいろちやうよ。  
いらいそひひいろおすしやさん  
おすしはいいいん  
おすしはいいいん



入賞 「ぎゅっ」

鎌倉市立西鎌倉小学校2年 小林 憲治さん  
こはやし けんじ

ママと手をつないで歩く

ぼくがぎゅっとするよ

ママもぎゅっとする

ぼくがぎゅーっとするよ

ママもぎゅーっとする

ぼくがぎゅっぎゅっとするよ

ママもぎゅっぎゅっとする

ぼくはママはむっむっ

あっという間に

スライディングのズスでいかにっへ

「行ってきます」

ぼくはズスにのる

ぼくはママが見えなくなるまで手をやる

ぼくは前をむいて

手をぎゅっぎゅっしてめる

入賞 「おとうとのシャツ」

清泉小学校2年

齋藤 実桜さん

ちっちなな ちっちなな おとうこの  
ちっちなな ちっちなな Tシャツを  
いつものように たたんでる

ちっちなな ちっちなな おとうとは  
ちっちなな ちっちなな シヤツをきる

ちっちなな ちっちなな おとうこの  
ちっちなな ちっちなな シヤツたちは  
ならんで お日さま あびている

ちっちなな ちっちなな おとうのが  
きれいなシヤツきて わらってる

ちっちなな ちっちなな おとうこの  
ちっちなな ちっちなな Tシャツを  
今日も きれいに たたんであげる

# 入賞 「音」

鎌倉市立御成小学校2年 松尾 英力まつお えりおさん

ピポーン

しんかんせんのドアがあく時

ヒューガチャン

ドアがしまる時

ブーウンー

車が走る時

スースー

すべりだいですべった時

ウー

りゅうちゃんがおこった時

ペし!

かをたたく時

シャー

おふろのシャワーが出る時

シユー

ビールをあける時

ガガーフユー

おじいちゃんがねる時

フーフー

りゅうちゃんがにおいをかいでる時

ガガガガ

ぼくとおぼあちゃんが

電どうのえんぴつけずりげずりげずっている時

早おきした時しずかだった

りゆうちゃんはぼくがくると

いつもより

目を2ミリぐらい大きくあけた

## 入賞 「楽しいプール」

大府市立共和西小学校3年 鶴田 舜弥さん

つるた しゅんや

一時間目にプールに入ったら

なぜかしげんに

ポチャポチャという音がしました。

つめたかったです。

なぜか、プールに入ったら

気持ちのいいかんじがしました。

先生にだるまうきってという言葉を

もらいました。

みんな

だるまみたいな形になりました。

入賞 「ふしぎなふしぎな弟」

鎌倉市立小坂小学校3年 宮武 喜更みやたけ きさらさん

ふしぎなふしぎな弟は

どんな物でも

はいざい使って

工作しちゃう

ギターをひいて ミュージシャン

けんをさして せんたいヒーロー

はたをふって 応援団

小づつみ届けて クロネコヤマト

ベルト王かん身につけて すてきな王子様

ふしぎなふしぎな弟は

けんかをするとなまいきだ

私が変わるくない時も

私が変わると 思ってる

言葉づかいやたいどがね

ギザギザチクチク

おにみたい

ふしぎなふしぎな弟は

けんかをするとおにだけど

いっしょにいと たのしいよ

そばにいないと

ワッハッハーと わらえない

一人でわらうの つまらない

ふしぎなふしぎな弟は

やさしい心も いっぱいだ

私がかまっている時は

スーパーマンに へん身だ

毎日毎日

私のそばに いてくれて

ありがとう

これからも いっしょにね

ワッハッハー

ウッフッフー

わ・ら・お・う・ね

## 入賞 「ド」

文教大学付属小学校4年 平石 結子<sup>ひらいし ゆいこ</sup>さん

わたしが苦手なリコーダー

夏休みの課題曲

下の「ド」あつてむずかしい

あなを全部ふさがなきや

指にはぶっくりまるいあと

うでもせなかもいたくなる

「ド」の音全然出なくって

ピーピーひっくり返った音ばかり

わたしもキーキーわめいちやう

リコーダーなんて大きい

それでもブーブー言いながら

ププププププ練習だ

ホーツ出たよ「ド」の音が

やったーやったー

ホーツホーツ

気持ちがるるん軽くなる

ププププププホーツホーツ

ププププププホーツピーイ

時々ピーイというけれど

わたしはキーキーわめかない



## 入賞 「夏のお客様」

鎌倉市立関谷小学校5年  
清水菜乃羽さん

毎夜 ポストの所にひっそりと何かがあらわれる  
夜といっても9時ぐらいのおそい時間にしかこない  
よく見てみると体の形や大きさ色がちがう  
大きいお父さんみたいなのやっ  
小さい子どもみたいなのやっ  
一つだけ目があいてないおじいさんみたいなのやっ  
かわりばんこにやってくる  
時には二ひきでやってくる  
家族なんだろうか  
夜になぜくるのだろう  
外灯の電気に虫がたくさんあつまっている  
ずっと見てもなかなか食べない  
ある夜 外灯に登っていた  
まんまるい外灯にひつついている  
月に登っているみたいだ  
白っぽい体が光りですけている  
宇宙旅行しているみたいだった  
今夜も来ているかな ヤモリ

# 入賞 「八百メートル走」

葉山町立葉山小学校5年 須田 匠すだ たくみさん

よーい、パーン

ぼくの中でポップコーンがはじけた

手が

足が

心ぞうが

勝手に飛び出す

みんながぼくについてくる

ふりはらおうとしても

ねぼっこくついてくる

なつとうみたいについてくる

景色もいっしょについてくる

二周目

気がついたら後ろの景色が変わっていた

足音がせまってくる

せなかにずんずんささってくる

思わずふり返った

にげろ

にげろ

にげろ

ぼくも景色も

一気にゴールに飛びこんだ

## 入賞 「石ひめ様」

湘南白百合学園小学校5年  
渡邊 瑞紀さん<sup>わたなべ みずき</sup>

まずは上着をひろげます

きれいな石をおきます

やさしくおねがいます

これが石ひめ様です

それから二つか三つ

ちがう石をおいて家来にします

石ひめ様はどんぐりの朝食をとり

もみじの葉のいすにこしかけます

家来は大きないちょうの葉をもち

石ひめ様をゆつくりとあおぎます

くれぐれもゆつくりと

石ひめ様はおしゃれが大好きです

松葉のかみかざり

きらっと光る

朝つゆのブローチ

花びらのかんむり

石ひめ様がおしゃれをする

本当に美しいのです

家来は思わずみとれてしまいます

あなたが家に帰る時

石ひめ様をつれて帰ってあげてください

上着のポケットにそっと入れてあげましょう

家につくまで

石ひめ様はぐっすりねむってしまいます

大事にしてあげてくださいね

中学生の部  
入賞

## 入賞 「一枚の絵」

日本大学藤沢中学校1年 大野 亜里彩さん

おのの ありさ

真っ白な紙があった

これはどうということもない

私の日々

そのすぐ隣には、絵の具があった

これは色とりどりの

私の大切な人たち

紙の上には、一本の筆があった

これは少し頼りない

私の手

自分一人じゃ、何も描けない筆は

それぞれの色を持つ絵の具に

助けを借りて

そのままじゃ何のおもしろみもない

真っ白な紙に

少しずつ、色鮮やかな線を描いた

その線は、

くねくね曲がったり

かくんと折れたり

ぶつっととぎれたりしながら

だんだんと紙を染めていく

ここに、完成した一枚の絵がある

これは様々な過程を終え

ついにできあがった

今の私

さあ、ひきだしから

もう一枚の紙をとりだして

次は何を描こうかな

入賞 「過去から未来へ」

女子学院中学校1年 菊地 愛佳さん  
きくち あいか

忘れるってどういうことだろう

嫌でたまらなかったことが

角ばっていた石が丸みを帯びるように

少しずつなつかしさへと

変わっていく

うれしい気持ちかな

忘れるってどういうことだろう

大好きだった人のことが

時という制御しきれないものに流されて

少しずつ記憶から

遠のいていく

悲しい気持ちかな

忘れるってどういうことだろう

写真で撮った断片的な表情だけが

唯一の道しるべのように

私を過去へと

導いていく

怖い気持ちかな

写真の枠からはみ出してしまった

風景や表情ほど

本当は一番大切なのかも知れない



その一瞬の笑顔を

その一コマの風景を

私はいつまでも覚えていられるだろうか

心の中のアルバムの枚数は

絶対に減らないのだろうか

忘れるってどういうことだろう

まだ幼なかったこの私が

一段一段、階段を昇っていくように

少しずつ大人へと

近づいていく

それってどんな気持ちかな

今の私には分からないことだらけだけど

問い続けていこう

未来へと

## 入賞 「とき」

鎌倉女学院中学校1年 鈴木聡美さん

すずき さとみ

そよそよふくのは風で

さわやかなにおいなのは草で

かぎりなく青いのは空で

そして

いつまでも深く難しいのはとき

ときというのはとても難しい

目に見えないし

手にふれられないし

存在しているのは分かるけど

すごく抽象的で二度と戻れないもの

だし

だからこそ大切

だから

いろんなことを見たり聞いたり

触れたりして

いろんなときの感情を覚えて

私の「とき」として

胸に刻みたい

入賞 「もう少し我慢してから言って」

紀美野町立野上中学校1年 家本 康正さん

おうい

二階でぼうつとするなら宿題やりなさい

そんなことはわかっている

言われなくてもわかっている

そのフレーズは毎日滝のように流れ渡る

その言葉を言う前に確認してほしい

確認の上ならば

すぐに言う事聞けるのに

三秒でも一秒でも我慢してくれれば

これからずっと楽なのに

## 入賞 「目に見えない孤独」

神奈川県川学園中学校2年 正能 菜唯さん

ある朝、目が覚めたら、私は狼だった。

「イヌ科」というくくりには属しているが、かといって犬でもなかった。

私は、「動物園」からはじき出され、

自立していかなくはならなかった。

私は、孤独だった……。

私は耐えきれず、かたく目をつむる。

目を開けると、私は狐だった。

私は孤独が嫌で、

「イタチ科」のみんなと仲良くした。

私は嘘に嘘を塗り固め、自分を取り繕った。

私は偽物の私を好きになれなかった。

私は、孤独だった……。

私は耐えきれず、かたく目をつむる。

目を開けると、私はライオンだった。

私はみんなと仲良くしたいのに、

「ネコ科」のみんなに見た目で怖がられた。

私は一人になった。

私は怖がられる自分の姿が嫌いだった。

私は孤独だった……。

私は耐えきれず、かたく目をつむる。

目を開けると、私は「私」に戻っていた。  
それでも、

私は狼のように

グループになんとなくいるだけで、  
狐のように

嘘の私を塗り固めて、

ライオンのように

見た目で全てを判断された。

こうして

「教室」という名の檻の中で、

今日も私は、

孤独を苦々しくなめていくのだ……。。

## 入賞 「えのしまアルプス」

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校2年 内貴 航路朗さんないき こうじろう

えのしまおきのアルプスのようにたかいその波は  
いったいどこからくるのだろう

えのしまおきのアルプスのようにたかいその波は  
いったいだれがつくるのだろう

ぼくは知らない

えのしまおきのアルプスのようにたかいその波は  
ちいさなボートなどまたたくまにのみこんでしまふ

ぼくのヨットはアルプスをすすむ

アルプスのてっぺんのちようぼうは、てんぼうだいのようにひらけるけれど  
そのたにまでは波のかべにかこまれてきようふにふるえる

えのしまおきのアルプスのようにたかいその波は  
いったいどこからくるのだろう

えのしまおきのアルプスのようにたかいその波は  
いったいだれがつくるのだろう

こたえをさがしてうみをすすもつ

たとえこたえをみつけれなくても

## 入賞 「トリケラトプス」

関東学院中学校2年 中島久博さん  
なかじま ひさひろ

この空は君が見上げた空と同じだろうか

君は二億年後の世界の何を見ているのか

今は体も鉱物に変わり

眼球も空洞になり

長い沈黙に安らいでいるのか

君は二十万年前のアフリカのイブを知っているか

彼女は誰に恋していたのか

誰も知らずに時は移り

この空は君が見上げた空と同じだろうか

君は人の生きる意味を知っているか

人はただ生きているのだろうか

今は誰も話さなくなり

恋することもなくなり

ただ争う時間を浪費していないか

この空は君が見上げた空と同じだろうか

## 入賞 「24hours?」

大阪桐蔭中学校2年 西本 威央利さん  
にしもと いおり

朝起きる 歯を磨く

朝ご飯を食べる 学校に行く

授業を受ける 昼ごはんを食べる

また授業を受ける 家に帰る

晩ご飯を食べる お風呂に入る

宿題をする 歯磨きをする

そして寝る

こんな風にして 僕の一日は

また幕を閉じる 明日もまた

ぐるぐる ぐるぐると

同じ レプリカの

日々の螺旋や 輪廻が

僕を待っている

そう まるで平行線のように

この浴び慣れたシャワーから出る

二十四時間分の パズルのピースを

空白に埋めては 毎回毎回

嗚咽の繰り返し

いつに成ったら 抜け出せる?

この虚無の中から 闇の中から

光が 新しい日常が 差し込む日は

染まらない日常に 虹が掛かる日は



叫べ 強く叫べ

僕は此処だ 僕は個個だと

自分の居場所を指し示せ

そしたら広がるだろう 見つけるだろう

新しい世界へ飛び立つきみを

でもその前に目覚まし時計のアラームを

消しては如何だろうか？

## 入賞 「まちがい」

福岡教育大学附属久留米中学校2年 牟田 怜史さん

牟田 怜史さん

この問題の答えは3だ

2ですよ

お母さん今、6時だよね

18時ですよ

やあA君

Bですけれども

やばい月曜日だった

日曜日ですよ。

人は

まちがいの中で立っている

人は

自覚したまちがいをはずかしいと感じる

今、まちがっているかもしれないのに

自覚していなければ

どうどうと立っていられる

自覚していなければ

ふんぞり返ってもいられる

だから

自覚していても

人に言われても

気にして

はずかしがったり

ごまかしたり

することはない

少なくとも

自分は

そういう生き方を、

していきたい

入賞 「部活動」

福岡教育大学附属久留米中学校3年 酒井 祐輔さかい ゆうすけさん

一人で球を打ってみる

風を切る音

はじく音

はねる音

何度も何度もくり返す

音は無限にくり返す

自分の中でくり返す

心の中でくり返す

二人で球を打ってみる

風を切る音

はじく音

はねる音

音はリズムを奏でてる

リズムは無限にくり返す

僕と君の間でくり返す

心の会話をくり返す

みんなで球を打ってみる

風を切る音

はじく音

はねる音

音は大きな山となる

体育館にこだまする

みんなの声もこだまする

みんなの気持ちもこたまする

熱い夏が終わった時

もう球は打てない

風を切る音

はじく音

はねる音

心の中で聞こえてる

耳をすませば聞こえてる

静かな体育館で響いている

発行日 平成27年11月8日

編集・発行 鎌倉文学館指定管理者

鎌倉市芸術文化振興財団・

国際ビルサービス共同事業体

鎌倉文学館

鎌倉市長谷 1・5・3